

国際フォーラム

第2回

活動報告

メディアが報じない 中国人権弾圧

2月23日(月・祝)、日比谷コンベンションホールにて、第2回国際フォーラム「メディアが報じない中国人権弾圧」(共催:幸福実現党、民主中国陣線)を開催しました。第1部では、チャイナ・エイド創設者 ボブ・フー氏と幸福実現党 政務調査会長 里村英一氏のスピーチを行いました。



【第一部 基調講演】

ボブ・フー氏 (チャイナ・エイド創設者)

「皇帝が神を演じる時—中国における迫害と復活」

本日のテーマは「習近平が神になろうとする時: 中国共産党による中国における宗教迫害と中国の復活」です。私はかつて無神論者であり、天安門事件で学生運動を率いた後、一冊の本をきっかけにキリスト教に出会い、地下教会の牧師となりました。そして自らも投獄を経験し、現在は米国へ亡命して「信教の自由」を訴え続けています。

現在、中国ではキリスト教の家庭教会をはじめ、ウイグル族やチベット仏教、法輪功など、あらゆる信仰に対する弾圧が過去40年で最大規模に激化しています。政権は今、信仰に対して「3つの戦争」を仕掛けています。第一は、信仰の象徴である「十字架」の強制撤去や破壊です。第二は、教典である「聖書」への戦争であり、販売を禁じ、スマートフォンからアプリさえも完全に削除させました。そして第三が、「宗教指導者」に対する残忍な迫害です。私の友人である牧師や人権弁護士たちも、不当に逮捕され、非人道的な拷問を受け、長期の懲役や強制失踪の犠牲となっています。

しかし、彼らは決して権力に屈していません。過去80年間の迫害の歴史が証明しているように、国家がいかに物理的な弾圧を強めようとも、人間の魂の自由まで縛ることはできないのです。極限の監視と抑圧の下にあっても、真の信仰を求める人々の数は実際に増え続けています。「信教の自由」とは、単に特定の宗教を信じる自由ではありません。「良心の自由」や「結社の自由」の基盤となる、社会における最も根源的な「基本的人権」なのです。



自由世界に生きる私たちに何ができるのでしょうか。マーティン・ルーサー・キング牧師は「結局のところ、我々は敵の言葉ではなく、友の沈黙を記憶するものだ」と言いました。抑圧され、暗い獄中にいる人々が何より恐れているのは、世界からの孤立と沈黙です。どうか迫害下にある人々のために祈り、彼らに代わって力強く声を上げてください。手紙を書き、国際社会に訴えかけるのです。

すべての人の信教の自由を守るため、どうか共に立ち上がりましょう。

里村英一氏 (幸福実現党 政務調査会長)

「デフレ不況とトランプ圧力で独裁強める習近平体制」

私は長年、中国の弾圧の現場を取材し、民主活動家が突如消息を絶つといった現実を目の当たりにしてきました。なぜ習近平政権は、これほどまでに宗教を恐れ、弾圧を強めるのでしょうか。

歴史を振り返れば、中国では宗教が核となり、国を動かす大きなパワーとなってきました。かつての「太平天国の乱」が清朝を滅ぼすきっかけとなったように、共産党は「命に代えても信仰を守る」という宗教の力を、政権を覆す最大の脅威として本能的に恐れているのです。事実、習近平政権になってからの締め付けは異常です。前の政権下の20年分を合わせた以上の人々が、わずか1年で弾圧されるという過酷な状況にあります。

現在、中国は深刻なデフレ不況に陥り、足元の政権基盤がぐらついています。独裁政権は、自身の足場が危くなると、必ず締め付けを厳しくします。その矛先が今、宗教や言論に向けられているのです。

この21世紀に、このような人権侵害が許されていいはずはありません。中国の未来は、私たちの未来でもあります。マスコミが報じないこの真実を知り、今こそ私たちは声を上げ、支援の輪を広げていかなければなりません。



【第二部 パネルディスカッション】

第二部では、ゲスト2名に民主中国陣線副主席の王戴氏が加わり、参加者の質問も交えながら活発な議論が行われました。



王戴氏



ボブ・フー氏



里村英一氏



島山元太郎氏

私もボブ・フーさんも、1989年の天安門事件で共産党の本質を悟りました。平和的な民主化を願った学生たちが戦車で踏みじられたあの日から、私たちはこの独裁体制と戦い続けています。



天安門事件が起きたあの年、世界にはもっと自由・民主・信仰の価値観が広がるはずでした。しかし、中国の民主化が潰されたことで、今の人権無視の国家が残ってしまった。私たちはこの認識をもっと強く持たないといけないと思います。



習近平政権は今、デフレ不況で足元がぐらついています。「食べさせてくれるから」という理由で沈黙していた国民も、経済がダメになれば声を上げ始めます。今こそ外圧を強め、独裁の延命を許さないことが大事です。



フィギュアスケートのアリサ・リュウ選手のお父さんも、天安門を経験した亡命者です。弾圧に屈せず正々堂々と娘を育てた彼のように、私たちは「第2世代」と共に、非暴力で共産党にNOを突きつけていきます。



中国共産党が組織的に行う臓器売買は、国際法廷でも確認された事実です。信じられないことに、ドナー待ちが数年かかる移植が、中国では「2週間以内」に可能です。これは、需要に合わせて「殺害」が行われているという残酷な実態を示しています。



日本にも、一見共産党を批判しているようで、実は攪乱を狙うインフルエンサーが入り込んでいます。人権活動家を誹謗中傷し、社会を混乱させる動きを見極める目が必要です。



私たちは、中国での迫害を「暴露 (Expose)」し、被害者を「励まし (Encourage)」、リーダーを「育成 (Equip)」しています。トランプ政権下では大統領令により、投獄された弁護士一家を米軍の支援で救出したこともあります。



共産党の魔の手は海外にも及んでいます。アメリカにいる私の家族も数ヶ月間、包囲され殺害予告を受けました。自由な国にいても、彼らはスパイやSNS、家族への脅迫を使って、私たちの口を封じようと狙っています。



それぞれの立場の中で、中国に対して、自由・民主・信仰という価値の下で連携を強めていこうとしています。日本、台湾、そして米国の三ヶ国がしっかりと連携していくことが大事だと思います。



ボブ・フー氏が語る 米国外交の基軸としての「信教の自由」

米国において「信教の自由」は、外交政策の不可欠な柱として確立されています。1998年に制定された「国際宗教自由法 (IRFA)」に基づき、国務省内には大統領直属ポストが設置され、議会には独立機関「米国国際信教の自由委員会 (USCIRF)」が創設されました。これにより、国家主導で深刻な宗教迫害を行う国々を「特に懸念される国 (CPC)」として特定し、制裁を科す実効的な仕組みが運用されています。トランプ政権下では、この「第一の自由」は国家安全保障の最優先目標へと引き上げられました。国連本部でのサミット開催や、「国際信教の自由と信仰同盟 (IRFBA)」の創設は、多国間連携によって独裁政権の暴挙を阻止せんとする確固たる意志の現れです。この普遍的価値観は、信仰を弾圧し、自らが神に取って代わろうとする専制君主に対する、自由世界最大の精神的防波堤となっているのです。



第2回
国際フォーラム
ダイジェスト映像



参加者の声

日本のマスメディアが中国の今の現状を報じない中、生々しいお話を聞いて非常に良かったと思います。

中国スパイが米国内でも活動してる具体的な話もされていました。今後、米国と日本で力を合わせて、中国の政治体制を変える動きの起点になるような講演でした。

中国共産党で英語の教師とキリスト教の牧師をされ、唯物論主義の中で亡命されて活動されているフー氏にすごく感動しました。

フー氏が一生懸命クリスチャンたちを助けようとしていることに感動しました。

フー氏の活動というのは、米国では非常によく知られていますが、日本でもっと知られるべきです。今回のフォーラムが開催されたということは素晴らしいことだと思います。もっと彼の活動が日本および世界に広く知られることで、中国の宗教弾圧への圧力をかけるということが重要だと思います。



フー氏の中国での苦しい体験、壊される十字架の写真に心が痛みました。中国共産党と戦うために、世界の宗教が協力することが必要だと感じました。

厳しい現状を教えてもらい大変ショックでした。新しい未来を作っていくことが一番大切なことです。日本と中国の明るい未来をつくるために、今の独裁共産党政権は倒さなくてはなりません。

第1回も参加しましたけれども、今後も続けて、日本のみなさんと交流していきたいです。中国の民主化実現のために頑張ります。